

01-023

産後早期の母子における地域子育て支援拠点の活用に関する研究—生後4か月児をもつ母親へのアンケートを通して—

足立 千晶

西宮市立春風小学校

問題と目的 本研究は、産後早期における「地域子育て支援拠点事業」の意義を考察し、活用につながる要因を探り、効果的な支援を提案することを目的とした。1、産後4か月までの育児において、母親がどのようなしんどい状況を抱えているのか 2、地域子育て支援拠点の利用状況と、どのような支援を希望しているのか 3、しんどい状況と、地域子育て支援拠点での支援がいかなる関連性を有しているのかを検証した。

研究方法 4か月児健診にて保護者106名にアンケートを実施結果と考察しんどい状況について、足立(2016)もとに項目を作成し、『分からない不安』、『関わりの希薄さ』、『余裕のなさ』の3因子を抽出した。初産婦と経産婦で比較すると、『分からない不安』と『関わりの希薄さ』は、初産婦の方が有意に高くなった。ひろばの利用率は、これまでにA市のひろばを利用したことのある割合は、49%で先行調査よりも大幅に改善していた。ひろばにおける支援は、『交流』と『相談や情報』の2因子を抽出した。どちらも初産婦のほうが有意に望んでおりしんどさに対応した結果となった。しかし、ひろばの利用状況は、経産婦よりも初産婦のほうが有意に低い結果となった。ソーシャルサポートと、しんどさとの関係性を検証したところ、有意な負の相関が認められた。身近な他者からのソーシャルサポートが不足している母親は、しんどい状況を抱えており支援ニーズがあると考えられた。一方、「ソーシャルサポート」と「ひろばにおける支援因子」との間には有意な相関関係は認められず、「しんどさの各因子」と、「ひろばにおける支援因子」との間にも有意な相関関係は認められなかった。このことから、現状の「地域子育て支援拠点事業」は、産後早期の母親のしんどさに対応できる体制にはなっていないと考えられる。支援ニーズを探るにあたり、因子分析で出てこなかった「母親の体調」と「訪問希望」について分析したところ、「母親の体調」は、しんどさのすべての因子との間に有意な相関関係を示し、医療や保健の専門職の果たす役割は大きいと推察された。「訪問希望」は、しんどさのすべての因子と複数のソーシャルサポートに有意な相関が認められ、専門職による個別的な関わりの中でソーシャルサポートの充実を図る必要が示唆された。

01-024

NICU/GCUに入院する子どもへの痛み緩和ケアに参加した親の思い

稲生 藍

名古屋大学 医学部 附属病院

【目的】 児の痛み緩和ケア（以下痛みのケア）に参加した親の思いを明らかにする

【方法】 当院NICU/GCUに入院した児の親が面会中に行われる痛みのケアについて、無記名自記式質問用紙への回答を依頼し、単純集計と質的記述的に分析した。名古屋大学大学院医学系研究科生命倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号：2019-0056）。

【結果】 分析対象は19例、両親数19名（父親8名、母親11名）、平均年齢34.7（±6.4）歳であった。対象患児の出生体重1922（749.3-2771.5）g、アンケート回収時の児入院期間は110（25-213）日であった。親が痛みのケアについての情報提供を受ける前に、『児が痛みを感じていると考えていたか』については、父親8名中7名が、母親は11名すべて「痛みを感じる」と回答した。『痛みのケアへの参加意欲』について、「とても参加したかった」10人（52.6%）、『痛みのケア参加後の思い』について、「とても良かった」13人（68.4%）であった。『今後も痛みのケアに参加したいか』について、15名（78.4%）がとても参加したいと回答した。実際に痛みのケアに参加した思いについて、「とてもよかった」と回答した親（n=13）と「よかった」と回答した親（n=6）の2群に分けて自由記載結果を分析した所、「よかった」群からは【子どもを理解したい】【退院後の育児の方策】【安心を与えたい親心】の3つのカテゴリと《ケアの有効性の実感》など5つのカテゴリが抽出された。「とてもよかった」群からは、【ケア参加を通して果たされる親役割】と【育児への自信】の2つのカテゴリと《児入院中の無力感》《傍にいて伝えたいたいぬくもりと力強さ》など9つのサブカテゴリが抽出された。

【考察】 当院では、すべての入院児の親への処置時の痛みのケア参加を推奨している。本研究結果から、児の疾患や入院期間にかかわらず、親は児の痛みのケアへの参加意欲が高く、ケア参加での満足度も高いことが明らかになった。親の多くは、児入院中の体験として、《児入院中の無力感》を感じる一方で、痛みのケアに参加することで、児の痛みを緩和するだけでなく《傍にいて伝えたいたいぬくもりと心強さ》という思いを有し、児にケアできることへの喜びを見だし、親としての自己効力感を高めることに繋がること示唆された。また親が繰り返し痛みのケアに参加することにより、【退院後の育児への自信】につながるという変化も示唆された。